



8月の歳時 夏祭り・お盆

夏祭りは多くの場合、地域の伝統や文化と深く結びついています。又、8月といえば、「お盆」が親しみのある代表的な行事です。暦の上では秋を迎える時期となります。先祖の霊を家に迎えて供養しながら、「お陰さまで元気で暮らしています」と感謝する行事です。

とうめい

ニュース 2026.8.1 Vol. 300

〒248-0034 厚木市船子237
TEL. 046-229-3377
発行者: 河野 昌史
編集責任者: 林田 朋子
印刷: (有)タイム21

ホームページアドレス <http://www.tomei.or.jp/clinic/>

視力低下で来院される患者さんへ 眼科: 市邊 義章

TOPICS



視力低下の主訴（患者さんの一番困っていること）で来院される患者さんは、様々な「見づらさ」を表現されます。実はこの患者さんの「見づらさ」の中に、診断につながる重要な情報が含まれているのです。では、いくつか例を挙げてみましょう。

・真ん中が見づらい

眼の奥の網膜の中心である黄斑部（おうはんぶ）の病気や視神経（見るための神経）の病気が疑われます。

・上半分が見えない

眼底や視神経の下方向の病気（見えないところと反対側に病気の場所があります）が疑われます。

・歪んで見える、小さく見える

「変視症：へんししょう」といい、まず間違いなく黄斑の病気です。

・ぴかぴか光って見える

「光視症：こうししょう」と言われ、加齢でも起こりますが、網膜裂孔（もうまくれっこう）（網膜に孔があく）や網膜剥離（網膜がはがれる）で生じることもあります。

・光の周りに虹が見える

「虹視症：こうししょう」といい、緑内障など眼圧が高くなった時に現れる症状です。

・糸くずや虫見たいなものが見える

「飛蚊症：ひぶんしょう」といい、目の中身である本来透明なゲル状の硝子体（しょうたい）の中に濁りが生じて出る症状です。大体が加齢とともに濁りが生じる生理的なものなのですが、網膜剥離や眼底出血でも生じるので、必ず検査が必要です。

・蛍光灯の光やヘッドライトがまぶしい

「羞明：しゅうめい」といい、角膜混濁や水晶体混濁（白内障）など光の通り道に混濁が生じると光が乱反射し、まぶしさを感じます。

・暗いところが見づらい

「夜盲：やもう」といい、加齢とともに夜間は多少見づらくなりますが、網膜色素変性という、夜盲と視野狭窄をきたす病気がありますので、精査が必要です。

・物が二重に見える

「複視：ふくし」といい、両目で見ると上下、左右あるいは斜めに像が二重に見えるが、片方だけで見ると一つに見える、というのが真の「複視」です。斜視（目の位置が左右で違う）や眼球運動障害（目の動きが悪い）などで見られる症状です。一方、片方の目で見ても二重に見える（お月さんが片方でも2個3個に見える）は「単眼複視：たんがんふくし」といわれ、近視、遠視、乱視の矯正が不十分（メガネがあてない）であったり、白内障で見られる症状です。

どこの眼科でもまず来院されるきっかけとなった症状や、既往歴、使用薬剤など記入していただく問診票が渡されます。せっかく眼科に来たのだからと、いろいろと症状を書きたくなるお気持ちはよくわかりますが、まず一番困っていることは何かを端的に教えてください。特に視力低下を主訴に来院される場合、以下の点がポイントとなります。

- 1) 症状（見づらいなど）は右目、または左目だけなのか、両目なのか → 右または左目片方だけの異常なら、眼球そのものの異常を考えます。もし両目とも見え方がおかしい場合は両目に同時に起きた眼の病気も考えられますが、頭の中の病気である可能性があります。
- 2) 症状はいつからか？ 突然発症なのか、徐々におかしくなってきたのか？ → 脳梗塞・脳出血がそうであるように、血管系の病気は突然発症します。目も血管で栄養を受けているので、その血管が詰まったり（梗塞）、破れて出血したりすると、ある日突然見えなくなります。このような突然発症の目の病気は緊急性が高いことが多いので様子を見ないで直ちに眼科受診することをお勧めします。
- 3) どこが、どのように見づらいのか？ → 「真ん中がぼやけている」・「歪んでいる」・「二重に見える」・「暗い」・「上半分が見えない」、など見づらさを、端的に教えてください（前記参照）。

以上、「見えづらい」という主訴で眼科に来院されるときのポイントをいくつか挙げてみました。これからも当科では皆さんの目で困っていることに対し、真摯に対応してまいります。